

結城紬について

結城紬の歴史

結城紬の主な特徴

- 結城紬に使用されている手つむぎ糸は、繭の真綿を人が手でつむいでとった糸です。結城紬には、たて糸、よこ糸ともにこの手つむぎ糸が使用されており、このため軽く、温かい特徴を持っています。
- 結城紬を地機で織るために糸に糊をつけますが、洗張りをするたびにこの糊がとれ、光沢を増し、毛羽も取れて風合いがよくなり、体に馴染む等の特徴があります。
- 染料は選定されたものを使用していますので、染色堅ろう度が高く、変色や色落ちがしにくくなっています。

結城紬の文化財や工芸品の指定

- 昭和二八年 茨城県 無形文化財（縮織）
- 昭和三一年 文化庁 重要無形文化財
- 昭和五二年 経済産業省 伝統的工芸品
- 昭和六三年 茨城県 郷土工芸品

結城紬の生産地

茨城県の結城市と近隣（筑西市、下妻市など）、栃木県の小山市から下野市付近です。



BC五〇年

和銅 七年（七二四）

大同 二年（八〇七）

延元 元年（二三三二）

慶長 六年（二六〇二）

寛永一五年（二六三八）

正徳 二年（二七一一）

慶応 二年（二八六六）

昭和三年（一九五六）

昭和五二年（一九七七）

崇神（すじん）天皇の御代、多屋命（おおねのみこと）が久慈郡に機殿を造営して、織物を始めました。これが純（あしぎぬ）で、結城紬の原形と言われています。常陸国の純（あしぎぬ）が奈良朝廷へ上納された記録が残っています。また、奈良朝廷に上納された布が、正倉院に保存されています。

「古語拾遺（こごしゅうい）」の中に、「麻が好く生ずる所が総の国であり、穀木（ゆうのき）の好く育つ所が結城の郷（さと）である」と記されています。

「庭訓往来（ていきんおうらい）」の中に、諸国名産の一つとして「常陸紬（ひたちつむぎ）」の名が記載されています。

江戸時代にこの地を治めた伊奈備前守忠次は、染色と縞の織法を技術導入するなど「紬」の振興・改良に努めました。この頃から「結城紬」の名が広く全国に知られるようになりました。

「毛吹草（けふきぐさ）」の中に、七産地一〇種類の紬が諸国の名産として取り上げられており、この中に結城紬の名称がでています。

和漢三才図絵（わかんさんさいずえ）に、最上品の紬として、「結城紬」が紹介されています。

大塚いさ女、須藤うた女の両女により、初めて「紬」の緋織りが織られ、ここに「結城紬」も画期的局面を展開することになりました。

「結城紬」は、久留米緋、小千谷縮とともに国の重要無形文化財に指定されました。

「結城紬」は、伝産法に基づく国の伝統的工芸品の指定を受けました。

結城紬のできるまで

結城紬は、手つむぎの真綿糸、手くくりによる拵くくり、地機による製織など、そのほとんどの工程を手作業によって丁寧に作り上げられている伝統的な紬織物です。真綿から糸をつむぐ糸とりから製織まで、この結城地方が誇る、織りの技術と工程について紹介します。

一、真綿かけ



袋に繭を入れ、水に浸したのち重曹を適量加え煮込むことを煮繭（しゃけん）といいます。煮繭した繭をぬるま湯の中で両手を使って一粒ずつ広げます。広げた五〜六枚の繭を一枚にしてさらに大きく袋状に形を整えたものが袋真綿です。



二、糸とり



糸をつむぐ前に袋真綿にごまからとった油を使って「なめし」を行い、潤滑性をよくします。これをよく引き伸ばし、「つくし」と呼ばれる竹やキビガラでできた道具からませ、適当なところから指先を使って糸状に引き出し、「おぼけ」と呼ぶ入れ物の中に蓄えていきます。



三、糸あげ（ポッチあげ）



「おぼけ」に入った手つむぎ糸のかたまりを「ポッチ」と言い、この「ポッチ」から糸を管に巻き取る作業を「糸あげ」または「ポッチあげ」と言います。糸がからみ合わないようになら豆やおはじき等を使って、押さえながら静かに巻取ります。



四、拵くくり（拵しぼり）



「拵くくり」とは、設計された図案に合わせてたて・よこ糸の墨付けを行い、墨のついた箇所を細い綿糸で固くしぼるものです。「拵くくり」した糸束を染液に入れると、綿糸でしぼられた部分は染まらず、染まった部分と染まらない部分を組み合わせ、柄にします。



五、染色



拵しぼりが終わった糸を染色するのに、結城紬では「たたき染め」という独特の方法を用います。糸束を染液に浸し、棒の先にしぼり付け、板にたたきつけることを繰り返します。こうすると、綿糸でしぼられた糸束の間に、染料を均一に染み込ませることができます。



六、糊つけ



手つむぎ糸自体は撚りが弱いので弱く、織機で織れるようにするため、糊付けをします。このため、結城紬を仕立てる際は、必ず湯通しをして糊抜きをする必要があります。糊抜きの済んだ結城紬は、柔らかく織目がこんで一層風味が増します。



七、機巻き



拵模様を合わせながら一定の張力をかけ、糸を「男巻き（おまき）」に巻きつけます。途中ズレが生じないように、紙でできた「機草（はたくさ）」をはさみながら、丁寧に巻いていきます。



八、機織り



結城紬は、地機（じばた）と呼ばれる我が国で最も古くから伝わる織り機で織られます。地機は、織り手がたて糸の端を腰で吊り体全体を使ってよこ糸を織り込んでいきます。また、箆（おさ）と杼の木で作られた大きな杼（ひ）で交互によこ糸を打ち込み、丈夫な織物にします。

